しがない村医者の私が勃たない皇帝陛下に性指導ですか!?

～とんでもない性欲お化けを育ててしまいました!?～

プロローグ　3p

第一話　転生医師リザ・ローランド　5p
★

第二話　皇帝カイゼルの苦悩　38p

第三話　皇帝の私にフェラチオプレイだと……!?　48p
★

第四話　女医の手コキが忘れられません！　68p
★★★

第五話　忘れられなくて会いに来ました　133p
★★★

第六話　オモチャがバレてしまいました!?　193p
★★★

第七話　プロポーズ大作戦!?　265p
★★★

番外編
皇帝陛下の性感マッサージで我慢大会させられちゃうお話　335p
★★★

★　挿入なし（フェラ・手コキのみ）
★★★　挿入あり

◆プロローグ◆

「カイゼル陛下……！　もういい加減ご決断ください！」

幼い頃から世話を焼いてくれている侍従長のリチャードが険しい顔で吠えた。既に老齢で普段穏やかな彼にしては珍しいことだった。だが、その理由は分かっている。

「陛下がご成人されてもう何年も経っております。臣下も心配しておりますし巷ではあらぬ噂を流す民まで現れる有様……そろそろ本腰を入れてお妃様を選ばなければ」

「……リチャード。私だって出来るならばそうしたい。だが……こんな状態では……」

「私がなんとか致します。首都から少し離れた村に腕利きの医者がいるという噂を聞きました」

「無理だ……今までだって何度も診てもらったが、よくなった試しがないだろう」

「いいえ。なんでも、その者が開発した治療魔道具は恐ろしいほど効果があるらしく巷で大評判なんだとか。わざわざ郊外に住むその医者を訪れる者も多いのだそうです。しかも珍しい女医だそうで……私はかなり期待できると考えております」

現在に至るまで何十人という医者にかかったが、誰一人この症状を改善できる医者はいなかった。男でも女でも変わらない。ありとあらゆる方法を試してこれなのだ。

だが、リチャードがこんなに鼻息荒く話すとは。彼も自分と共に何度も希望を打ち砕かれてきた一人だ。世話係として長年寄り添い、誰にも言えない悩みもこうして親身になって相談に乗ってくれる。それゆえの――――。

（……期待ばかりしてもどうせ無駄だろうが……リチャードがここまで言うんだ。何もしないわけにはいくまい）

「分かった。では、その医者に話を通してきてくれ」

「承知しました」

第一話　転生医師リザ・ローランド

アリスタニア帝国首都郊外にある小さな村。民家が少しと民家よりも広い畑に占領されたこの村には、村民の人数に見合わないほどひっきりなしに人が訪れる場所がある。

「リザ先生！　うちの亭主が怪我しちまったんだ！　申し訳ないんだけど見ておくれ！」

けたたましく開かれた玄関扉から現れた夫婦は入るなり診察用の椅子に腰掛けた。夫の方の足を見ると青痣が出来ている。

「まあ、ルベルクさん。またお怪我ですか？」

「いやー、うっかり屋根から落っちまってねぇ」

「何がうっかりだよ！　よそ見してたんじゃないか！　すまないねぇ先生。またいつものくれると有り難いんだけど」

「ええ。でも、ちょっと待ってください。診察してから決めましょう」

棚から治療用の脱脂綿やら道具を取ってくると、ルベルクさんの向かいの椅子に腰掛けた。ルベルクさんは隣の村で大工をやっていて、しょっちゅう怪我で訪れる。だから慣れたものだ。

「じゃあ骨折していないか見ますね」

道具の中から取り出した虫眼鏡でルベルクさんの足を見る。どうやら、彼の足は骨折まではしていなかったらしい。

「大丈夫です。骨は無事ですね。打身で腫れているだけでしょう。しばらく動かさずにゆっくりしてください。いつもの湿布、出しておきますから貼ってくださいね」

「はぁー毎度のことながらすごい道具だねぇ。骨が折れてるかどうかも分かるのかい」

「さすがはリザ先生だ。その『レントゲン』だったか？　すげぇ魔道具だ。そんなもん持ってるのは先生ぐらいだよ」

私の名前はリザ・ローランド。この小さな村で医者をしている。自分で言うのもなんだけど、割と人気の村医者だ。

この世界には便利な道具がない。そう思うのはきっと、私が別の世界からの転生者だからだろう。

私は生まれた時から前世の記憶がある。前世では日本という国でＯＬをしていた。だけどある日偶然事故に遭ってしまって――――目が覚めたらこの国、アリスタニア帝国の医者の娘に生まれていた。

そんな私の新しい両親となったローランド夫妻はこの小さな村で医者をしていて、細々と薬草を作ったり患者を診察していた。

両親は優しかったし、全く知らない世界で手に職をつけて将来困らないためにもと幼い頃から勉強に勤しんだら「この子は秀才だ」と両親がベタ褒めしてくれて、この国の基本医療を叩き込んでくれた。

そして大きくなってからは両親について見習いの医者として働き始めた。医師免許なんてない世界だから、私のような人間でも、多少の知識があれば医者として認められた。

そんな生活を始めて少しした頃のことだった。両親が出掛けた先で事故に遭い、二人とも亡くなってしまった。流石にそればかりはどうにもできず、私は二人を先に見送る羽目になった。本腰を入れて医者業をし始めたのはその頃からだ。

だけどこの世界は私がいた日本よりも遥かに文明が劣っていた。医者のレベルも人それぞれで、ひどい人は傷ができたら洗って布を巻くぐらいのレベルだ。

両親は独自に薬を開発していた分その人達よりは遥かに優秀だったけど、現代みたいな便利な道具がない分治療は時間がかかった。流石にこれだけでは不衛生だし、きちんとした治療はできないからと、私はあることを企む。そう、道具の開発だ。

幸いなことに、この世界はお金を払って魔法使いに依頼をすればどんな道具でも作ってもらえた。魔法に関してはさっぱり分からないけど、魔法使いは現代で言うところの職人のような扱いで、ものづくりが主な仕事だそうだ。

それから「絆創膏」や「包帯」、「レントゲン機械」なんかも作ってもらった。

現代の知識をフル活用して創造したこの世界のスーパー医療器具だ。これがとっても役に立って、作業は効率良くなったし、患者さんの傷も早く正確に治療できるようになって万々歳だった。

私の開発した医療道具は当然この世界には全くないものだったから、瞬く間にうさわが広まり、気が付いたらリザ先生とか呼ばれて診療所に行列ができるようになっていた、というわけだ。

（って言っても、私はもともと普通のＯＬだったし、こんなにわか知識でよく医者なんてやれてるよね……現代だったら絶対に捕まってる）

ルベルク夫妻を見送った後、何人も患者が続いた。そろそろ休憩しようと扉にクローズの看板をかけようとした時だった。

「リザ先生」

呼び止められ顔を上げる。そこにいたのは、首都で娼館を営むマダム・ロザリンテだった。ちなみに、彼女も常連になりつつある。

「マダム……もしかして、いつものですか？」

「ええ、ええ。もしかして、休憩かしら？　間が悪かったわね」

時刻はとうに昼を回っていた。娼館は夜から営業だから、慌てて来たのかもしれない。

「いえ、大丈夫ですよ。どうぞ、中へ」

私は休憩の看板をかけてマダムと一緒に中へ入る。中へ入るなり窓を閉じて、カーテンを全部閉めた。

「それで、マダム。今日は例のアレをご入用で？」

「ええ。毎度とんでもない早さでなくなっていくものだから、ついこの間頂いたばかりなのに、ごめんなさいねぇ」

「いえ、喜んでいただけて何よりです」

私は木製の棚の中から鮮やかな赤色の瓶を取り出した。それをきっちり二十四本木箱の中に入れ、マダムの前に置く。
「リザ先生、もっと多く作って頂くことって出来ないかしら？」
「そうですね……可能は可能なのですが、診療所にストックをたくさん置くのは厳しくて……これ以上のロットで作ると、お金もたくさんかかりますし……」
「なら、作ったものを直接うちの店に置いてくれたらいいわ。お金は前金でお支払いするから、ぜひお願いしたいの」
「分かりました。じゃあ、次回からはマダムのお店に直接持っていくようにします」
「助かるわ。リザ先生のローションはとっても人気なのよ。みんなで取り合いになっちゃうぐらいなんだから」
「あはは……どうも」
「そうそう、それとこの間持ってきてくださったあの魔道具だけど……」
「試して頂けましたか⁉」

「ええ。うちの上お得意様達に。ものすごぉ〜くお喜びだったわよぉ♥あんな画期的な道具を開発するなんて……もう、革命としか言いようがないわっ」
「良かった。試作品ですが、上手くいったみたいですね」
「あれは販売してくれないのかしら。ええっと、『バイブ』と『オナホール』だったかしら。ぜひアレも購入したいわ」
「ええっと……ごめんなさい。あれはまだその……改良中でして」
「まぁっ！　早くして欲しいわ！　うちの店でぜひ取り入れたいのよ！　店の子も大絶賛してたし、お得意様もあんなにお喜びになったの見たことなくて……」
「そ、そんなにですか……」
この世界は全てにおいて私がいた前世とはかけ離れている。圧倒的不便だ。
そんな中で私は医者を志し、みんなを治療してきた。そんな私がなぜ、「ローション」やら「バイブ」やら「オナホール」を作っているのか。
それは前世で亡くなる直前の出来事のせいだ。

あの日……私は彼氏の家で過ごしていた。付き合ったばかりの彼氏の家で一緒にいたらやることは決まっている。私達もそうなる予定だった。だけど――――。

（い、痛い……っ！　なんでそんなにガシガシするのよ！）

彼氏のおざなりな前戯はそれはそれは酷いものだった。女性経験はあると聞いていたけど、そんなものとても信じられないような乱暴な手付き。今考えれば私はヤりたいがために付き合った彼女だったのかもしれない。

この世にはアダルトビデオなんかの影響をモロに受けてしまうおバカな男が一定数いる。そんなバカな男に当たったのだろう。転生以降「ガシマン」という不名誉なあだ名をつけて脳内で呼ぬほどに、彼は下手くそな男だった。

あまりに痛すぎて涙が出た。そもそもそれ以前に、愛情を感じられない、適当な態度にショックを受けて着の身着のまま彼の家を飛び出し、そして――――。

最悪な死に方だ。今思い出しても情けない。だけどそんな場所から転生して生まれ変わったこの世界も、たいして変わらなかった。そう、ガシマンが蔓延る世界。

この世界はちっとも便利じゃない。そのくせ娼館なんてものはあったけれど、聞く限り私が知っている性の手練達とは雲泥の差だった。

そもそもこの世界は性の知識を持っている人間がまったくいない。医療自体が浸透されていない時点でまさかとは思ったが、圧倒的！　セックススキルの無さ！

だから娼館に行っても男達は満足出来ず、病気は蔓延し、娼婦は下手くそだと愚痴を溢し、男ももやもやしたまま店を出る。

（この世界は濡らすの概念すらないからね……ああ、恐ろしい）

そんなわけでマダムの話を聞いて見かねた私は始めにローションを作成してマダムに試作品として使ってもらった。

手淫……いわゆる手コキの際や挿入の際に使うと痛みが軽減し、気分を高められるとお勧めして。中身は無害な植物の液体とハーブ数種を混ぜたもので、ちょっとムラムラした気分にさせてくれる。

なんとこれが娼館で大ヒットしてしまい、私は次にバイブとオナホールを作成した。

これを作ってもらうのに魔導使いにあれこれ説明した記憶が懐かしい。そしてこれも大絶賛されてしまい、私は性の伝道師として不本意ながらこうしてマダムにひっそりとえっちな道具を売ることになった。

ただ、私の名前は伏せてもらっている。性の知識が全くないこの世界であんなアダルトなものを開発してしまったわけだが、人によってはきっと嫌悪感を示すかもしれない。医者である私が大人のおもちゃを開発したと噂されるのは恥ずかしすぎる。

マダムにローションを一箱渡した後は遅めの休憩を取った。作り置きのシチューを温めてパンを齧る。

私が普段もらっている治療費は両親の意向もあり安く、生活はそんなに裕福じゃない。ただここ最近はマダムに売るローションのおかげで蓄えも増えて安心して生活できるようになってきた。

ただ、お休みが少ないのが痛い。せっかく転生したものの、どこにも旅行に行けていないし、遊ぶ暇がない。いたとしても独り身だから寂しくなってしまうだろうけど。

休憩を終えた後も患者さんを幾人か診察して、その日の仕事を終えた。

この世界のいいところは、日が沈むと仕事が終わることだ。どんな人でも、日が沈めば仕事を終わらせ、夕食なり家族の時間を始めるなりする。

フリータイムになった私は自家製の風呂桶にお湯を溜めバスタイムに入る。両親が健在だった頃は軽い沐浴程度で終わらせていたけど、今は医者だから衛生的に気を配らないといけないという建前を掲げわざわざ風呂桶を作ってもらった。

これも魔法使いに作ってもらった自動湯沸かし機能がついた一品だ。とても異世界とは思えない便利さ。これがあるからこの家から離れられない。

この世界には私が知る限りちゃんとしたお風呂がない。普通の人達はみんな桶で体を洗っている。これも販売したら、ものすごく儲かるんじゃないだろうか。

（でも、医者ができる範囲でやらないとね……あんまりやると怪しまれそうだし）

事故死から始まった異世界生活だけど、私は気に入っていた。医者の仕事は以前と違って必要とされていると感じるし、みんなの役に立てていると思える。働いても働いても給料が同じで拘束時間の長い仕事をしていた頃に比べれば、今は天国だ。

欲を言えば恋人なんて出来ないだろうかと思っているけれど、仕事ばかりで患者との出会いしかない私には当分縁がないのかもしれない。

お風呂から上がってしばらく。のんびり明日の診察の準備をしていた時だった。

もう夜も遅いのに玄関の扉をノックする音がした。

（こんな時間に誰かしら……もしかして、急患？）

医者をしているとたまに飛び込みで患者が来ることもあった。でもこんな夜に来ることは少ないのに。しかも名乗りもしない。もしかして悪戯だろうか。いや、泥棒かも――。

放置するのも気持ちが悪い。慌ててカーディガンを羽織り、手近にあった棒を持って扉に近付く。

「……どちら様ですか？」

「夜分に申し訳ありません。ローランド先生に大至急ご相談したいことがございます」

穏やかな声だった。まるで老齢の紳士を思わせるような。

その声に幾ばくか警戒心が溶けた私は、ゆっくりと扉を開けた。そこにいたのは私が想像したような真っ白な白毛を束ねた老齢の男性だった。男性は私の顔を見ると軽く会釈した。

「このような時間に申し訳ありません。私リチャード・カッセルと申します」

「いえ、大丈夫です。伺いますので、奥へどうぞ」

リチャードさんを奥へ通し、患者用の椅子に案内する。多分悪い人ではない。本当に患者さんのようだ。

なんだか辛そうな顔をしていたので、私はひとまずお茶を淹れた。家の畑で育てた特製のハーブティー。自分の分とリチャードさんの分を淹れて、むか合わせに腰掛ける。

「それで、ご相談とは？」

こんな夜更けに神妙な面持ちで相談したいこと。きっととても大変なことに違いない。リチャードさんはわりと高齢に見える。それでいて一人で相談しにきたということは……家族にも言えないような深刻な悩みなのかもしれない。

「実は……勃起不全に悩まされておりまして」

「まぁ……それは大変ですね」

「いや、私ではくてですね。とある高貴なお方が……私の主人なのですが」

「あ……そうだったのですね。早とちりして申し訳ありません」

勃起不全。確か、現世ではＥＤとか言っていたような。詳しくは知らない。

リチャードさんの落ち着いた優雅な佇まいはきっと、その高貴な人のもとで働いているからだろう。どうも村の人とは違う雰囲気を醸し出している。

「ご主人様が成人されてもう随分経つのですが……その、満足にことを終えられたことが一度もないのです」
「失礼ですが、その患者様はおいくつですか」
「二十代半ばでございます」
その年齢にしては珍しいのでは無いだろうか。確か勃起不全は年齢とともに増加する傾向にあると聞いた。だけどこちらの世界でもあるなんて……。
きっともどかしいことだろう。それぐらいの年頃なら女の子とヤりまくりたい盛りのはず。
高貴な身分と言っていたから、貴族かもしれない。それなら尚のこと重要な問題だ。大きな家ほど跡取りが必要になる。子作りは必須の事項。だけど……。
「……私は医者ですが、勃起不全の症状を治したことはないのです。実際そのような患者様を診たこともなくて……せっかく来て頂いたのに申し訳ないのですが、私ではお役に立てないかと……」

「いえ、それでも構いませんから……とにかく診ていただけないでしょうか。どうしても無理な場合は仕方ありません。ですがご主人様はもうローランド先生に頼るしか無いのです……！」

リチャードさんの切羽詰まった様子を見ているとなんだか断りづらい。そのご主人様とやらはきっと、とても悩んでいるのだろう。

治してあげたい気持ちはある。私も医者の端くれだ。患者さんが喜んでくれるなら治してあげたい。できる限り全ての患者さんに真摯でありたい。だけど――――。

勃起不全に関しては知識がまるで無い。現世でもちらっと話を聞いただけだ。こちらの世界にはそんな医術はなく、両親からも聞いたことがない。私の適当な憶測で悪化でもしたら大変なことになりかねない。

「お気持ちは痛いほど分かります。でも……」

「ローランド先生の噂はかねがね伺っております。巷では考えつかないような医療器具を開発なさり、連日診療所には列が出来るとか……」

「それはそうですが……」
「それと、娼婦街でも……」
明らかに意味深な発言につい驚いてしまった。
（……まさかこのおじいさん、私がマダムに売ってるローションのこととか知って……!?）
マダムには口止めしている。だから漏れるはずがない。もしかしたらこのおじいさんはただの従者、ではないのかもしれない。
「ローランド先生の実力は大変素晴らしいものです。だから私は、先生こそがご主人様を治してくださると期待しております」
「で、ですが先ほども言ったように、私はそのような治療をした経験がなくてですね……」

「ご主人様はもう何人もの医者に診ていただきました。ですが誰にどのような治療をさせても全く良くなる兆しがなく……このままではご主人様の名誉が失墜してしまう……！　私はもうご主人様の落胆するお顔を見たくないのでございます……」

「ああ……っ泣かないでください！　わ、分かりました。どうなるか分かりませんが、それでもよければ一度診察させて下さい……」

「ええ、ええ……！　是非にお願い致します！　仮にどんな結果になろうとも責任は一切追及致しません。先生の思うままに診察して下さい」

断るつもりだったのに……ローションのことを口に出されたんじゃ断れない。もしかしてリチャードさん、それを分かってて敢えて言ったのだろうか。

そのご主人様の診察は後日首都のとある屋敷で行われることになった。

だけど診察するのに条件がいくつかあるそうだ。

一つは、仮面で患者の顔を隠すこと。もう一つは深夜に診察を行うこと。そして、患者が誰か詮索しないこと。

この条件を守るのであれば、診察料として三百ペルー（現代でいうところの百万ぐらい）を用意すると言われた。

そのご主人様が身分が高い男性なら、勃起不全だなんて知られたくないだろうし、誰にも見られたくないに違いない。だけど診察料としてはあまりにも高すぎるからと断ったけど、リチャードさんは守秘義務もあるのでと譲らなかったので、仕方なくその条件を呑むことになった。

そういうわけで、現在私は深夜に大荷物を持って首都を歩いている。

流石に深夜を回っているからか、首都の路地にはほとんど人がいない。みんなもう寝静まっているだろう。

私が首都に行くことはあまりない。というのも、診療所がある手前、基本的な診察は自宅で行っていた。薬草畑もあるし、道具をいちいち持ち出すのも大変だ。だから患者さんには申し訳ないが、診療所での診察が私のスタイルになっている。

首都には平民から貴族、王族といろんな身分の人達が住んでいる。だけど私が診察したことがあるのは平民の人ばかりだ。医者は平民しか診ない医者と、貴族ばかり診る医者がいて、私は平民医だ。

首都にもたくさん医者がいるけど、貴族医ばかりで平民医はほとんどいないらしい。だから首都にいる人達は医者にかかるために首都からわざわざ出る必要があった。

（変な話よね。医者のくせに貴族しかみないなんて……）

貴族医の詳しい話は知らないが、急患で駆け込んでも断られるらしい。診察費も高く、それゆえ平民は門前払いされているのだろう。

リチャードさんのご主人様はおそらく貴族だから、きっとその医者達に診察されたはずだ。

言われた番地の場所にたどり着くと、大きな屋敷があった。どこぞの貴族が住んでいるであろう屋敷の門扉は巨大で、人間用かと疑うほど。

（変ね……こんなに大きなお屋敷なら、門番が一人ぐらいいても良さそうなのに）

だけどその屋敷は少々変わっていた。まるで空き家みたいに誰もいない雰囲気だ。本当にこんなところに患者が――――そう思ったところで、門扉の向こうからランタンを持った人影が現れた。リチャードさんだ。

「あ……リチャードさん。よかった、ここで合っていたんですね。誰もいないので間違えたのかと……」

「こちらはご主人様の別邸でございます。普段は人がおりませんので……では、どうぞ中へ。ご主人様がお待ちです」

門扉の中に通され、真っ暗な中を進む。これだけ大きな別邸を持っているとなると、相当上位の貴族。だけど誰一人いないってことは、ここは避暑地みたいに時々来てくつ

ろぐ場所なのかもしれない。確か地方の貴族はタウンハウスを持ってるっていうし……。それか、敢えて人払いをしているか。

「あの……リチャードさん。他のお医者様はどのような診察をされていたかご存知ですか？　一応知っておいた方がいいと思いまして……」

ランタンの灯りがぴたりと止まる。リチャードさんは深刻そうな顔で振り返った。

「私が同席したわけではないのですが……ご主人様の話では、もうとにかく痛かったと。二度と診察しないでくれと断った医者もおります」

「そ、そんなに……」

一体どんな診察をしたのだろう。痛いと言ったわけだからなんとなく想像はつくけど……まぁ、勃起不全の治療法がこの世界にないのなら、手探り治療になっても仕方ない。その医者はハズレだったのだろう。

「今まで様々な方法を試しました。医者から言われた薬草を煎じて飲ませたり、女性を呼んでみたり……ですがどの方法も効果がなく、ご主人様は度重なる治療で疲れている

のでございます。正直に申しますと、今回の診察も首を横に振られました。ですが、ご主人様にとってこれは切実な問題……なんとしても改善しなくては」

ものすごいプレッシャーだ。これで失敗したらどうなるんだろうか。ひょっとして廃業に追い込まれたりしないだろうか。

やがてリチャードさんはある部屋の前で立ち止まった。ノックをして静かに扉を開ける。中は広々とした部屋で、蝋燭の灯りだけが部屋の内部を照らしていた。

その中にある大きな天蓋付きのベッドに座る男性。フード付きのローブを被って、半面の仮面をつけている。それに、艶やかなシルクのガウンを羽織っていた。

「ご主人様、ローランド先生をお連れしました」

「ああ……」

低く落ち着いた声。ご主人様と呼ばれた男性は顔を上げて私をチラリとみたものの、表情は分からない。

今まで散々な診察を受けてきたから、特に期待していない……そんな雰囲気だった。

「では、先生。お願いします。何かあればそこのベルでお呼びください」
リチャードさんは話をすることもなく扉から出ていった。私のことは大方説明しているのかもしれない。
しんと静まった部屋に蝋燭が燃える音が聞こえる。沈黙が気まずい。
(とにかく……いつも通り診察しましょう。どうするかはその後よ)
私は男性の前に座った。ベッドに腰掛ける男性を見上げる。
「医者のリザ・ローランドを申します。お話はリチャードさんから伺いました。患者様のプライベートなことは一切口外いたしませんのでご安心ください」
「……随分若いな。もっと歳を取った女性が来ると思ったが」
「私の両親が診療所を開いておりまして、その関係で私も医者を志すことになりました。私の歳が若いことで不安なこともあるかと思いますが、私も医者です。できる限りのことはしたいと思っております。どうか診察にご協力ください」

男性は何も言わなかった。断られなかっただけマシかもしれない。この世界の適当な医療には私もビックリしたから、彼の落胆ぶりは想像に容易い。おばあちゃんの唾つけとけば治るレベルの対処では、期待もしなくなるだろう。

「では、局部を拝見出来ますか？」

「き、君に見せるのか……!?」

「はい。見ないとどんな状態か分かりませんので」

こんな若い女医に勃たないアレを見られるのは恥ずかしいかもしれない。

だけど私も仕事中は医者だ。男性や女性の陰部を見たことは何度もある。いくらローションとかバイブとかを開発しているからといって、いつもえっちなことばかり考えているわけじゃない。

男性はやや渋ったものの、丈の長いガウンを捲ってそれを取り出した。太く筋肉質な太腿の間にある男性の陰茎は所謂「ふにゃチン」状態だった。勃起は全くしておらず、ぐったりという表現が適当かもしれない。

（結構おっきそうなのに……これで勃起不全だなんて、なんて勿体無いのかしら）
「失礼ですが……触っても宜しいですか？」
「……好きにしてくれ」
陰茎を触診する。怪我をしたとか、かぶれているとかそういうのではない。一応私が触れると反応する。全く無反応ではなかった。
とにかく勃起不全のことをよく知らないから、そこから調査しなければ。
「あの、今までに女性との性行為はどれぐらい行いましたか？」
「……覚えていない。治療に来たという女を含めたら、二十は超えていると思うが……」
「その時はどんな感じでしたか？」
「いつも……痛くて途中で萎えてしまう。全く勃たない訳ではない。勃つ時もあれば、勃たない時もある。だが最後まで出来たことはほとんどない」
「そうですか……自慰はされますか？」

「……っそんなことまで聞くのか君は」
「当然でございます。その時の状況を把握しないと治療法が分かりませんから」
「……したことは、ある。時間はかかるが、自分では最後まで出来ることが多い」
「なるほど……では本番の時にだけ勃たないわけですね」
「……そうだ」
「頻度はどれくらいですか？」
「……週に、二度か、三度ほどだ。しないときもあるが」
リチャードさんは勃起不全だと言っていたから全く勃たないのかと思っていたが、勃つことは出来るらしい。しかも自分でオナニーした時だけ。そのオナニーもそれほど多すぎるわけでもなさそう。そして性行為は痛いときた。
（もしかして……この人もそうなんじゃない？）
頭の中にある考えが浮かんだ。漠然としたものだから、これが正しいのかは分からないが。

「分かりました。では……これからいくつか試したい事があります」
私は持ってきたトランクケースを開けた。その中からローションが入った瓶を取り出す。
「それはなんだ」
「これはローションという薬品です。自然由来のもので作ったので舐めても飲んでも害はありません。これを使って触診したいのですが、構いませんか」
「……任せる」
了承は得られた。私の考えが正しければ、これで結果が出るはずだ。
私は瓶の蓋を開け、手にたっぷりとローションを取り出した。それを人肌で温めて、ゆっくりと男性の陰茎に垂らす。
「……っ」
「冷たかったですか？」
「いや……大丈夫だ」

「痛かったら言ってくださいね」
ローションが亀頭からとろり流れていく。それを助長するように手のひらで満遍なく陰茎に纏わせる。とにかく優しく、ゆっくりと。すると男性の陰茎が少しづつ勃ち上がり始めた。
さっきはそこそこ大きい、ぐらいに思っていた男性の陰茎は擦れば擦るほど相当な大きさに仕上がっていく。まさにビッグマグナム。どこが勃起不全だと疑いたくなるような大きさだ。
前言撤回。仕事中はムラムラしないと思ったけど、これは流石に……。
「つく……ぁ……」
男性の口から喘ぐような小さな声が漏れた。痛いとは言わない。どうやら、これは彼に効果的だったようだ。
勃起してきた陰茎が徐々に皮から浮き上がる。私がゆっくりと両手で扱いていくと、男性の呼吸音も荒くなってきた。

（やっぱり……この世界の人って、壊滅的に性技が下手くそなのよね）

まさかとは思ったが、この男性もそうだったようだ。多分この男性は勃起不全などではない。痛すぎて途中で萎えたか、相手が下手くそだったのだ。

マダムからローションが大流行していると聞いた時はまさかと思ったが、そうでもしないとイけないぐらいこの世界の人は下手くそなのだろう。

別に私はものすごい経験者とかではない。セックスは前世で数回した程度。知識は豊富だと思うけど決して上手い方じゃないはずなのに。

ローションが滑る音がじゅぷじゅぷと鳴る。すっかり硬くなった男性の陰茎はまっすぐ上を向くようにそそり勃っていた。

「あっ……っ、駄目だ……もう、出る……っ」

太腿の筋肉がビクビクと痙攣する。速度を一定に保ったまま扱き続けると、男性の先っぽから勢いよく白いものが吹き出した。解き放たれた精液が私の手のひらに掛かる。しっかりとした量だ。どうやら、私の目論見は成功したらしい。

「はぁ……っはー……一体、何を……っ」
やや後ろにもたれ、男性は息を貪った。どうやら、射精できると思っていなかったらしい。おまけに男性の陰茎はまだ天を仰いでいる。彼は元々持続力があったのだろう。それが二十半ばまでこんなことに……何ともったいないことか。
「お疲れ様です。診察の結果ですが……恐らく、あなたは勃起不全などではないかと」
「なんだと……？」
「ハッキリと断定は出来ませんが、そのように思います。あまり知られていないようですが、男性の勃起持続と射精のためにはそれなりの力加減とテクニックが必要です。今までは痛みのせいでそれが難しかったのでしょう。あなたは至って健全です」
「では……私は、問題ないということなのか……？」
「はい、問題ありません。現にこうして射精出来ましたから」
「……こんなことは初めてだ。人の手でこれほど……気持ちよくなるなど」

それは、今まで相手をしてきた人達がとても下手だったということだろう。ひょっとしたらローション云々よりも、相応の知識を伝える方が先なのかもしれない。

「見たところ、体を鍛えていらっしゃるようですし、元々体力はあるはずです。ただここは局部ですから、大事に扱わないと。お相手の方にもきちんとした知識をお求めになったほうがいいかと思いますよ」

「……分かった。ありがとう……まさか、自分が健全だとは思わなかった……いつも、途中で萎えてしまって……私はもう無理なんだとばかり……」

「自信をなくす必要はありません。誰にでもあることですから。あまり気負いすぎずラックスしてくださいね」

では、と荷物を片付け始める。理由がわかってホッとした。本当に勃起不全だったら、どうにもならなかっただろう。

その後リチャードさんと話し、彼が問題ないことを告げた。リチャードさんは涙を流して感謝した。そして、約束のお代金をどっさりともらい、私は屋敷を後にした。

第二話　皇帝カイゼルの苦悩

アリスタニア帝国は五百年続く大陸一の国家だ。五百年前大戦が起きた折、当時の皇帝が諸国をまとめ上げ、今のアリスタニア帝国が建国された。

それから度々と戦は起こるものの国は変わらずこうして存続し続けている。由緒正しい歴史ある国だ。

そんなアリスタニア帝国現皇帝である自分は、民から「勇敢なる若獅子」と言われていた。

成人する前、帝国に押し寄せた蛮族国家を放逐するため、自ら前線に出て剣を振るった。その勇猛果敢な様子は有難いことに現在も語り継がれ、皇帝となる足掛かりとなった。

しかしそんな自分は御年二十七を迎え、未だ妃と娶っていなかった。

前皇帝が病により突如崩御し、周囲から後継を望む声が上がったのはもう何年も前の話。なのに自分は気に入る妃がいないと結婚の話を先延ばしにしている。

普段は冷静に振る舞う自分がこれだけはと延々断り続けている理由を、大臣達も民も知らない。当然だ。それは決して人に言えない理由なのだから――――。

若い頃、いずれは皇帝の後を継ぐ者だと未亡人の夫人をあてがわれ、性教育を行った。当時自分はそれを責務と考えていた。教本の中でしか知らない行為。

子作りには痛みが伴うと書いてあった。だが実際のそれは自分が思っていた以上にひどいものだった。

「ふ、夫人……少し、痛いのだが……!?」

夫人に自分の陰茎を触られた時の痛みは今でもよく覚えている。皇子でなかったら、「いたたたたたた!!」とみっともなく叫んでいたかもしれない。体は毎日鍛えているが、それにしても痛かった。もぎ取られるかと思ったほどだ。

夫人との性教育は思うように進まなかった。そのうち夫人自体が嫌になってきて、その時間すらもやめてくれと匙投げた。

だが、その代わりにとよこされた夫人も同じだった。痛い。とにかく痛い。なんで男の方がこんなに痛い思いをしなければならないのかと何度も思った。

だが夫人も痛そうな顔をしていたのでおあいこかもしれない。結局この痛みを乗り越えなければセックスは出来ないのだろう。

しかしそれができず、自分は途中で何度も萎えた。

（もしかして……私は病気なのか……？　だからこんなにも上手くいかないのか……？）

剣を極め、学問を極め、生まれてこの方挫折を味わった事がない私は、満足に出来ないセックスにつまづいてそんな考えに至った。その頃にはすでに家庭教師など来なくなり、それよりも妃を娶れと周りから言われるようになっていた。私が未だに女性とセックスできずにいると知られないまま――――。

女性とセックスしようとすると必ず萎えた。だが自分で手淫するときはそうならない。

原因は分からず、どうしようもなくて困っている私に声を掛けてくれたのが昔からそばで支えてくれている侍従長のリチャードだ。リチャードはもうかなりの年だが、それゆえなんでも話せた。誰にも言えず恥ずかしいと思っていた事だが、リチャードは笑わず聞いてくれた。

「左様でございましたか……ずっとそばにおりましたのに、何もできず申し訳ありませんでした……」

「いや……いいんだ。私が黙っていただけだ……」

「かしこまりました。それならその症状に詳しい医者を探してまいります。きっと良くなるはずです」

リチャードの言葉に励まされ、その後幾人もの診察を受けた。診察は全て秘密裏に。皇帝ということは隠した。現皇帝が勃起不全だなどと知られたら笑い物になるからだ。

だがリチャードの言葉とは裏腹に、事は上手く進まなかった。
どの医者も夫人に触らせたのと同じように痛いだけの治療で、そうでなかったとしても満足に効果も得られない。曖昧な言葉に曖昧な治療。そんな診察に金を払うことも馬鹿馬鹿しく思えてきた。
（このまま妃を娶ったら……私が勃起不全だとバレてしまう。そうなれば私は笑い物だ。世継ぎも作れない。このままで国家破滅に――――）
気分は塞ぎ込む一方。舞い込む縁談はごまんとある。どうしようもなく途方に暮れていた時だった。リチャードがその医者を紹介してきたのは。
リザ・ローランド。首都郊外に住む女性医師。両親から引き継いだ診療所にて医業を営む巷で評判の医師。報告書にはそう書かれていた。彼女の診療所は平民に非常に人気が高く、連日診療所には列が出来るという。
アリスタニア帝国には他の国より医師が多いが、それは人口が多いからだ。だからと言って優秀な医師がいるとは限らないと、私はこの時身をもって知っていた。

医師は平民を安く診察する平民医と貴族を診察する貴族医、そして皇族を診察する宮廷医と分かれている。だから私がその女医師の名前を聞いたのは初めてだった。

リチャードはやけに彼女を推していた。それだけ実力があるらしい。

希望を持たせるようなリチャードの態度に私は多少なりとも期待したが、実際現れたのは思っていたよりも年若い、可憐な見た目の女性だった。

（こんな若い女性が来るなど、聞いていないぞ……！）

ただでさえ恥ずかしい診察だというのに、こんな若い女性に見られるなど。だが、彼女は私に少しも怯むことなく、落ちついた様子で診察してくれた。

診察中の彼女は淡々としていた。恥ずかしがる素振りも見せない。どうやら報告書の通り、きちんとした医者であるようだ。

だが、とにかく恥ずかしい。どうにもならない自分の駄目な部分を曝け出すのは気が引ける、早く終わってしまえと思っていた。はずだった。

彼女が不思議な粘液を手に纏わせ、ゆっくりと陰茎に触れると、たちまちその考えは消えた。

（なんだこれは……っ気持ち良すぎる……！）

手淫自体は自分でしていたから分かる。だがそれよりもはるかに気持ちがいい。ヌルヌルとした粘液が絡み付いて、例えようもない快感が全身を駆け巡った。

今まで誰に触られてもこれほど気持ちが良くなったことはないというのに、まるで魔法でも見せられているような気分だった。

手のひらがゆっくりと陰茎を擦り上げる。次第に私のそれは勃ち上がり、立派な大きさへと変化した。だが、萎えてしまうと思う暇がないほど、絶え間なく快感が続く。

彼女の手のひらは次第に早くなり、耐えきれなくなった私はついに――――射精してしまった。

全身に押し寄せる解放感。そして快楽。未知の体験だった。女性の手がこれほど心地いいものだとは思わなかった。

「はい。何も問題ありません。現にこうして射精できましたから」
そして彼女はこう言った。何年も悩み続けてきたことをこんなに簡単に終わらせてしまうとは。快楽の余韻と驚きでろくに感謝も言えなかった。私の陰茎は射精が終わった後もまだ勃起したままで、萎える気配はない。
本当に解決した。彼女は本当に医者だったのだ。
おかげでリチャードは泣いて喜び、私も失った自信を取り戻そうとしていた。だが――。

（おかしい……どうしてだ。あの時のように、気持ちよくならない……）
後日、自分でもあの時の手つきを再現しようと自慰を始めた。
だが、なぜだか思うようにいかない。確かに気持ち良くはあるが、あの女医者が触れた時のようにならない。

もしかして、あの特別なローションとかいう液体がないからなのだろうか。あれがないとあそこまで気持ち良くなれないのか……。

自分で射精することは出来るが、あの日の再現が出来ない。そのせいでまた不安が湧き始めた。

再び女性を前にしても、萎えてしまうのではないか。あの女医者の時だからたまたま勃起出来ただけなのでは――――。

「どうかなさいましたか、カイゼル陛下。浮かないお顔をされていますが……」

ぼんやりペンを浮かせたままの私の横でリチャードが顔を覗き込む。その手にはティーポットがあった。

「いや……」

「何か心配事でも？」

「その……あの時の医者だが……」

「あの時来た……？　ああ、ローランド先生ですね。先生が何か？」

「……その、もう一度彼女を呼ぶことは出来ないだろうか」
「……もしや、どこかお具合が悪いのですか」
「いや、そうではない。診察を受けたが、何せあの時一度きりで……私もまだ確信が持てないのだ。だからもう一度診察してもらった方がいいのではと――――」
いや、違う。忘れられないのはあの手付きだ。あの日以来、彼女の顔と手ばかりが頭に浮かぶ。そのせいで日中の仕事が手につかないぐらいに。
正直言うともう一度あの診察して貰いたい。あんなことをされては、自分の手ではとても満足出来なくなっていた。このままでは政務に支障も出てしまう。そのためだ。決して、やましいことを考えているわけじゃない。
「なるほど、承知致しました。では早速先生に診察を依頼しましょう」
リチャードは納得してくれたのか、うんうん頷く。
そう、これは皇帝としての役目を果たすための重要な事項なのだ。けっして、快楽のためなどではない。

第三話　皇帝の私にフェラチオプレイだと……!?

リチャードさんから貰った診察料の三百ペルーはそっくりそのまま保管した。というのも、あんな大金をもらうのは初めてで、なんとなく信用出来なかったからだ。

あの貴族の男性を診察するために私はリチャードさんが作成した誓約書にサインをした。そこには私が守るべき事項が書かれてあって、それを破った場合の措置も書いてある。

私はそんな大変な診察で得たお金をホイホイ使えるような太い神経の持ち主ではない。

そもそも、私が診察で得られるお金は一人の診察につき十から二十ペルーがいいところ。薬代を合わせても三十ペルーも取らない。だから、あの三百ペルーは本当に破格の数字なのだ。

（でも、あの人結構喜んでくれたみたいだし、リチャードさんも納得してたし……しばらくしたら使ってもいいかな）

ちょうど診療所を少し大きくしたいと思っていたところだった。最近患者が増えてきたから、助手みたいな人を雇って補助も頼みたい。一人でやるには限界を感じていた。

そんな日の深夜の出来事だ。再び診療所にリチャードさんが訪れた。あの夜の診察からちょうど一週間経っていた。

「あの……何か、問題でも……？」

「いえ、ご主人様がもう一度先生を呼んでほしいと仰ったので。そのお願いに参りました」

なぜだろう。彼には勃起不全ではないと説明した。もう私の診察は必要ないはずなのに。

「ですが……あの方は至って健康体です。もう診察する必要はないかと」

「そうなのですが、ご主人様曰く、あの一度では確信が持てないと。長年悩まされてきたことですから、まだ自信が持てないのでしょう。そういうわけで、申し訳ないのですが再度診察をお願い出来ませんか？」

そう言われてしまえば断る理由もない。ややこしい相手ではあるが、無理難題をふっかけられているわけではないのだから。

確かに、この世界の性技はあまりにもお粗末だ。そのせいで長年自分を勃起不全だと思い込んでいたのだから、彼の自信を取り戻すのは一度では難しいかもしれない。

私は再診察を承諾し、再び彼の屋敷で会う約束をした。

リチャードさんの主人との逢瀬は同じ屋敷で行われた。彼の主人は前回同様顔を隠し、ガウン姿でベッドに座っている。その佇まいは以前よりもどこかそわそわしていた。

「お久しぶり……ではないですね。前回の診察から体調はいかがですか？」

「そ、そのことなのだが……」
彼はなんだかためらっている様子だった。もしかして、私の治療で何か問題でも起こったのだろうか。あのローションは試作に試作を重ねているし、かぶれるようなものではない。ならば体質的に合わなかったとか……。
「もう一度、あの方法で診察してもらえないだろうか」
「え？」
「いや、その……あの時はうまくいったが、また勃たなくなったらと不安なのだ。確実に勃起できると安心したい」
なるほど。どうやら診察が間違っていたわけではないらしい。それなら話は簡単だ。前回と同じようにすればいいのだから。
「分かりました。では診察しますので見せてください」
彼がガウンの裾を捲ると太いものが現れる。見たところ、特にかぶれてはいない。健康な男性のそれだ。少し触れるとピクッと震えながら徐々に勃ち上がった。

（前回よりもかなり反応が良くなったみたい……今日はどうしよう。ローションを使えば簡単だけど……）

ローションは手っ取り早く濡らすことが出来て便利だ。痛みも軽減される。だけど彼が本番をするときにはローションはない。ローションばかりに頼っているとちゃんとした技術が身につかないから心配だ。

「……どうした。しないのか」

「いえ……前回のようにローションを使おうかと思ったのですが、旦那様が本番をする時にはローションがありませんので、できれば本番に近い形の方がいいかと……」

「む……確かにそうだな。なら、そのローションを買うことは出来ないか。それならなんとかなるだろう」

「旦那様。あのローションはそう何度持使わない方が宜しいかと」

「なぜだ。あんなに気持ちい――――いや、いい品だというのに」

「あれは元々痛みを軽減するために作ったものです。ですが本来男女の営みというのは、あのような道具に頼らず、然るべき技術が伴うもの。あれはいわば、ずるをしているのと同じなのです」

「ず、ずる……？」

「ローションを使えば簡単ですが、本来すべき工程を大幅に端折ってしまいます。それは本来男女がともに磨くべき性技……ローションを使うことは、『自分は技術がないですよ』と言っているようなもの」

「そ、そうなのか……!?」

……そこまではいかないかもしれないが、あれは元々娼婦達のために作ったものだ。彼女達は短時間で成果を上げることを必要とされる。だからローションで構わない。

だけど普通のセックスは別だ。このままローションがバカ売れするのは有難いが、それだとこの世界の人たちの技術は一向に上がらないだろう。

「そもそも、ローションの材料だっていつ消えて無くなるか分かりません。そんな不確かなものに頼るより、旦那様とその相手になる方が技術を磨かれれば宜しいのです。道具はマンネリ化を防ぐスパイスになりますが、いつもしていれば飽きてしまいます」

「では……どうすればその技術とやらは身につくのだ……？」

「そうですね……ローションを使わずとなると……」

言いながらふと気付く。そういえば、ローションなしだと私があんなことやこんなことをする羽目になるのではないだろうか。だってそういうことだ。道具なしでイかせるわけだから、使うのは私の身一つということに――――。

なんだか熱弁してしまったが、ローションを使った方が良かったかもしれない。このままでは私が……それだともはや医療行為ではない。ただのエロ医者だ。

患者の局部を舐めたり吸ったりするなんて……。だけど見れば見るほど彼の「おちんぽ」が魅惑的に見えてしまう。

「では……これからいくつか方法をお教えしますので、それを覚えてください。後日そのお相手の方に実践していただくといいでしょう」

「何を――――」

一度だけ、と言い聞かせ。彼のものに顔を近づける。そこは生臭い……というよりは石鹸のようないい香りがした。彼は上流階級だから、きっとちゃんとお風呂にも入っているし、いい石鹸を使っているに違いない。

ゆっくりと舌を使い裏筋から舐めていく。唾液を纏わせ、できる限り痛みがないようにたっぷりと。石鹸の香りと男性器独特の香りが入り混じって変な気分になりそうだ。だけどこれは診察。やましいことなど一つもない……。

「くぅ……っぁ、う……！」

彼の反応は悪くない。手に収まっていた陰茎は膨らみ、立派なものに成長した。よからぬ欲望が沸きそうになるのを抑えながら口全体を使って咥え込む。

「き、君は……っ何を、しているんだ……っ⁉　そんなところを、舐めて……っあぁ」

「これは口淫……いわゆるフェラチオという行為です。ローションを使用しない場合、このように唾液を潤滑油にして行えば痛みが軽減されます。さらに勃起を持続させる効果もありますし、挿入が難しい時でもこれだけで射精が可能です」

できるだけ事務的に、端的に説明する。彼にこれはやましい行為でないと分かってもらうためだ。

この世界の性技は現代よりはるかに少ない。男は挿入以外の行為を怠りがちで、女性も同じだ。そしてそのくせ快楽は求めているから厄介だ。マダムに聞いた話によると、この世界ではフェラをほとんどしないらしい。したとしてもよっぽど気が向くか、男のことが好きでないとしないそうだ。男も同じで、女性の下半身を舐めることはあまりないらしい。なんて勿体ない。人生損している。

「ん……ふぅっ……♥こうやって……お互いの性器を舐めると……んん、む、う……♥興奮、するんです♥♥は、ぁっ♥♥はっ♥は……そうすると、最後まで勃起出来るだけの体力が……つきますから♥♥んぢゅぅっ……♥♥♥」

「あ、く……♥駄目だ、そんなに吸われたら……っ♥♥もう、出てしまう……！　駄目だ、我慢できない……っ」

彼の陰茎がぶるっと震えた瞬間、舐めるのをやめて口から出した。射精前に止められた彼は一瞬表情をボヤんとさせた後、「どうして止めたんだ」と不満そうにこぼした。

「早すぎます。もっと我慢してください」

「何故だ。射精するまで持続出来ればいいのだろう」

「それでは早漏になってしまいます。宜しいですか？　セックスは出せばいいというものではありません。旦那様のように体力、質量……これだけポテンシャルが高い方であれば、もっと上を目指してください」

「もっと上とは……どのようにすればいいのだ」

「まず、射精を自在にコントロールする事です。優秀な男性はそれをやってのけます。そして相手の絶頂をもコントロールできるようになれば言うことなしです。セックスは

子作りのための行為でありますが、そこまでやれば常人には味わえないような快楽が追求できます。ローションなど到底及ばないような」

「あ……あれ以上に、気持ちよくなるというのか……」

……何を真面目にこんなことをしているのだろう。これではまるでリザ先生が教える丁寧なセックス講座☆ではないか。

だけどこの世界の男性は本当に侮れない。アダルトビデオを見せたらそれを教本と思い込んでその通りに実践する男子中学生と同じレベルだ。いや、中学生の方がマシかもしれない。

現に私の診療所にもその被害者女性が何人か通っている。いわゆるガシマンに悩まされている女性や、夫の挿入が早すぎるために辛い思いをしている女性だ。

（放っておいたらこの人も予備軍になっちゃう。上流階級なら尚更、ちゃんとした性教育をしてあげないと）

むしろ泣いて喜ぶようなセックスをこの人が出来るようになれば、私の評判も上がるし堂々とローションを売り出せる。そしてあわよくばバイブなんかも……いや、それは先のことでいい。とにかく今はこの人に集中しなければ。

「では、早速実践に移していきましょう。さっきと同じようにしますから、旦那様は我慢してください……ん、むっ♥♥♥」

真面目に言いながら男の人にフェラを教えるなんて滑稽だ。だけど名前も知らないこの高貴な男性の陰茎はとっても元気が良くて、口をぐいぐい広げてくるからつい夢中になってしまう。

確か、男性は視覚から快楽を得やすいと聞いた。私は敢えて髪を耳にかけて、咥えている様子を見せつけるように男性を見上げた。仮面をつけているから男性の表情はわからないけれど、口元を見る限りとっても気持ちよさそうに声を漏らしている。あとはイク寸前までフェラをして、イきそうになったら止めればいい。

◆◆◆

（なんなんだこの女医者は……っなんだこの診察は……!?）

リザ・ローランド女医に口淫されながら私は身悶えた。今まで感じたことのない段違いの快感だった。

彼女は丁寧に唾液を口から抽出すると、それを潤滑油がわりにしてたっぷり私の陰茎に纏わせ、あろうことか喉奥まで咥え込んだ。

到底考えられないことだ。今まで私に性教育を教えてきた夫人はそのようなことは一度もしなかった。教わったのは子作りに必要な挿入と射精に関することのみ。まさかこんな方法があろうとは――――。

だが効果は素晴らしい。ローションなしだというのに自分の陰茎がメキメキと硬くなるのを感じる。身体中が興奮して鼓動が止まらない。そんな感じだった。

彼女が口を窄めジュポジュポと音を立てながら抜き差しすると睾丸の奥から精液が湧き上がる感覚を覚えた。

（なんていやらしいんだ……っこんな淫らな表情で、男のものを咥え込むなど……っだが、これは……最高だ……！）

だが、彼女曰くすぐに出してしまうのはあまり宜しくないらしい。そして遅すぎても良くないのだそうだ。彼女は私に射精をコントロールする力を付けさせようとしてくれているようだ。

しかしこれは拷問に近い。絶頂しそうになると彼女はすぐに察知して口を離してしまう。そんなもどかしいことを何度も続けさせられたせいで、睾丸がパンパンに膨れ上がっていた。

「う、あ……♥頼む……もう、無理だ……射精させてくれ……っ」

若獅子と言われた私が我慢できずそう口にしてしまうほどには限界だった。気絶しそうなほどの快楽が押し寄せ、気を抜くとすぐにでも射精してしまいそうだ。温かい女医の口の中で出してしまいたくなる。

女医はチラリと私の方を見ると、口から少し陰茎を出してその下の竿を手で扱き始めた。

にゅる……♥♥にゅるにゅるっ♥♥にゅち……っ♥♥♥

先ほどよりも早いスピードで敏感になった陰茎を扱かれる。当然私の快楽ボルテージは一気に上がり、瞬く間に絶頂へ追い上げられた、

（もう無理だ……出てしまう……っ！）

我慢など到底できなかった。全身を痙攣させるほどの圧倒的な快楽が襲うと、頭が真っ白になった。放尿を我慢していた時のような開放感が私を包み込む。

びゅぐぅッッ！！！♥♥♥♥ビュグルルルッ！！♥♥♥

「あああぁぁあ……っ♥♥♥で、る……っ♥♥」

気が付けば女医の口内に射精していた。それに気が付いたのは、射精してから数秒後のことだ。だが今更我慢など出来るはずもなく、私のものを咥え込んだ女医の舌が竿を舐めながらそれを受け止める。

（こんなに、気持ちよかったのは初めてだ……手でされた時よりずっと……）

しばらく放心していると、ゆっくりと女医の口が離れていく。まるで私に見せつけるように半開きの形の良い唇から、先ほど私が吐き出した精液が見えた。

心なしか、彼女の表情はどこかうっとりしているように見える。男の精液を口に出されて、まさかそんなことはないと思うが。

だが、そんな光景に胸がずくんと疼く。私はもしかして、こんな姿にまで欲情してしまうのだろうか。モヤモヤした感情。彼女は私の診察をしてくれているだけだ。こんな感情は間違っている。

女医は持ってきたトランクの中から布を取り出しそれに精液を吐き出した。なんとなく、それを見てがっかりしてしまうのは何故だろう。

「……はい。お疲れ様でした。よく我慢できましたね。これだけ我慢できれば問題ないと思います」

「このようなことをされたのは……初めてだ」

めちゃくちゃ気持ち良かったですと感想を口にすることが憚られ、つまらない感想を漏らしてしまう。皇帝の私が女性に口淫されて乱されてしまうことは恥ずかしいことのように思えた。

「そうでしょうね……この方法はあまり浸透していないようですが、相手との信頼関係があれば、きっと女性側もして下さると思いますよ。勿論、旦那様が女性の性器を舐めてもいいのですが」

「な……!? 女性のを、舐めるだと……!?」

「ええ。先ほども申し上げた通り、ローションを使わずして痛みなく挿入するためには二つしか方法がありません。一つは先程のように舐めることで唾液を潤滑油がわりにすること。ですがそれだと粘度に欠けます。ですから男性は女性の性器を触ってたくさん

気持ちよくしてあげてください。そうすれば……あ、ええと……ここまでは分かりますか？」

「……さっぱり分からない」

リザ・ローランド。リチャード曰く、常人を逸した知識と知恵を持ってる医者だそうだ。彼女は並外れた発想で特別な医療器具を開発し、この国の医療発展に貢献してくれている。

その彼女が言うのだ。間違いないのだろう。現に私の勃起不全も改善させ、こうして恐ろしいほどの快楽を授けてくれた。

しかし……どれも聞いたことがない、見たことがないものばかりだ。彼女と話していると、自分が馬鹿なんじゃないかとさえ思えてくる。

「申し訳ありません……おせっかいを言い過ぎました」

「いや、そんなことはない。確かに驚きはしたが……君の話は大変勉強になる」

「色々言いましたが、一番は旦那様本人とそのお相手の方が楽しむことが大切だと思います。セックスは確かに子作りのために必要なことですが、義務感だけでやっても気持ち良くはなりません。男性器は精神的負荷を負いやすいんです。旦那様が奏えることが多かったのは、そのせいもあるのかと……」

確かに、プレッシャーはあった。周りから妃を娶れ、跡継ぎを作れと言われて、早くなんとかしないとと思ってばかりで、そんなことはカケラも――――。

「それと……これは本当にお節介だとは思うのですが……」

「なんだ？」

「旦那様のことは存じません。立場上難しいこともあると思います。でも一番は、好きなお相手とするのがうまくいく方法だと思いますよ」

「好きな相手……？」

「好きな相手なら、もっと気持ちよくしてあげたいとか、先ほどのように舐めたりすることは苦になりません。お互い大事にし合っていれば、自然と気持ち良くなれるものです」

――――考えたこともなかった。セックスをするのは妃に選ばれた女性だけで、子作りのためだけだ。そもそも、そんな女性がいたことがないから分からないが……。

「申し訳ありません。医者の戯言です。お気になさらず」

「いや……ありがたい忠告だ。心に留めておこう」

「旦那様ならきっと大丈夫です。ですから自信を持ってください」

「ああ……ありがとう」

その夜の診察は終わり、女医は屋敷から出て行った。私は自分の自信を取り戻し、ようやく妃候補探しのために本腰をいれる――――はずだった。